

(論 文)

展示と陳列の意味について (展示論, 上)

On the Meaning of the Japanese Words “Tenji” and “Chinretsu”

新 井 重 三*
Juzo ARAI*

I はじめに

言葉は生きていられると言われる。例をあげてみよう。きさま (貴様) と、あなた (貴方) の場合、文字でみる限りでは貴様の方が、より高い敬語に見えるが、辞書をひくと貴様とは「男性が同輩または目下の者に、あるいは相手をののしって呼ぶ場合に使う対称の代名詞」とあり、貴方の方は「相手を尊敬している対称の代名詞」とある。博物館でよく使用される「展示」と「陳列」の意味はどうだろうか。昔は陳列、今は展示という用語が多く用いられているが、意味まで変わってしまったのであろうか。貴様と貴方は明らかに意味が変わっているので使用する時には無意識的に区別しているが、展示と陳列の場合には無意識的に同義語として扱っているように見える博物館人もいる。

平成 2 年度 (1991 年) 日本博物館協会主催の指導者研究協議美術部門の講師をされた東京国立博物館企画課長、鷲塚泰光氏は 6 頁に及ぶ論文 (博物館研究 Vol. 26, No. 6) 中 13 か所において陳列、陳列室、陳列替、陳列方法、陳列物とい用語を用い、すべて陳列で統一している。この場合、すべて「展示」に書き換えても著者の意は通じるように思えるがいかがなものであろうか。

それとも、陳列と展示は、その内容が違う。両者を同義語として扱うことはできないという立場をとるべきなのか。展示論の基本にもかかわる問題でもあるので、この論文は筆者なりの調査法を述べて結論を導き出すことを目的とするものである。

なお梅棹忠夫は「展示学」の第 1 巻 (1984) 「展示学の課題と方法」の中で展示と陳列をとりあげ次のように述べている。「両者はどちらがうのか? 原理的検討も十分できない。いろいろ言われていますが、はっきりした原理が提出されたわけではない。」展示について、かなり詳しく述べている著者や文献の中でも両者の定義や相違点について統一的理解が出されているとは思えない。その意味でも、この論文が梅棹忠夫の疑問に応えるものであることを期待している。

II 展示と陳列に関する諸論

(1) 展示と陳列相違論 (展示優位論)

加藤有次 (1977) は「展示の理念」と題して次のように述べている。「従来の博物館の「資料」を並べて観せる方法には、きわめて主観的なものが多い。それは、博物館に「もの」を並べて見せるという考えの流れがあるからで、その並べ順を追ってみつめてみると、単に宝物の羅列であって、そこには何の意図も思想も認めることはできない。これを「陳列」という言葉で表現することができる。しかし、今後、博物館の中に「もの」を並べるということは、一貫した理念がなければならない。単なる並列、羅列ではなく、並べること自体に目的を持たせ、そこに並べられている資料が観る人を説得させるものでなければならない。このような考え方にもとづいて「もの」を並べることを「陳列」から区別して「展示」というのであるが、以後「展示」という言葉をその

*あらい じゅうぞう

連絡先 埼玉大学博物館学講座, 日本大学文理学部学芸員課程
丹青総合研究所エコミュージアム研究会
〒338 埼玉県与野市大戸 2-2-13 (自宅)

ような概念として扱うことにする。

倉田公裕(1979)は「陳列から展示へ」と題して次のように述べている。“展示(Exhibition)とは見せること(to show), 陳列すること(to display), 目にふれるようにすること(to make visual)であり, 多くの国語において, 展示とは, ものを選び意味のある表示(meaningful showing to things), 目的のある陳列(display with purpose)を意味する。展示は単なる「もの」の陳列ではなく, 「ひろげて示す」ことであり, そこには人に積極的に見せようとする意識があり, コミュニケーションのひとつの形態である。つまり, 意味があり, 目的を持って大衆に「見せる」ことである。”

佐々木朝登(1989)は「展示論」の中で次のように主張している。“陳列(display)なら「もの」があればできると考えられるが, 展示(exhibition)は単に「もの」があればできるのではなく, 「意図=構想」があつて, はじめて「もの」が生かされるのである。「もの」自身の美術的, 珍奇的, 骨董的価値に頼って, 物品を羅列して見せるのは「陳列」といい, 「展示=Exhibition」の範疇ではないのである。”

以上は展示と陳列を区別して, 博物館においては展示は陳列に優ると位置づけ, 陳列は低劣なものとして退けられるべきであるという論調で統一されており, 従来の古い博物館に多くみられるものと結んでいる。

それでは従来型博物館の指導的地位にあった棚橋源太郎(1950)の陳列に対する思想はどうであったのか。不朽の名著とよばれている「博物館学綱要」では展示と陳列は全く区別していない。むしろ99%は「陳列」を用いており, その中で「博物館で物品を陳列する目的は①物品を観衆の眼に愉快に映ぜしめること②知識伝達の方便として物品を利用することの2点の外には出ない」と結んでいる。この考え方は現在の展示では不動の原理であり, 陳列の理念, 目的, 構想等についても極めて具体的に事例をあげて説いている。また, 陳列は単なる羅列であつてはいけないとも述べているところを見ると, 上記の三者が主張している展示は, そのまま陳列に置き換えても矛盾するところはない。従って棚橋の頭の中にある「陳列」は上記三者の考えている「展示」と同じ概念としてとらえることができる。

(2) 展示と陳列相違論(一長一短論)

展示と陳列とはちがうという立場をとりながらも, 両者にそれぞれ市民権を与え, かつ一長一短論を展開しているものとして油井隆(1986)の論文がある。彼は「展示と陳列」と題して次のように述べている。

“展示は品物を並べて一般の人に見せることであり, 陳列は見せるために物品を並べることである。展示の「展」は並べるという意味もあるが「見る」の方が重視されている。一方, 陳列の「陳」はならべるという意味そのものである。従って, 展示は人に見せて示すことであり, 陳列はきちんと並べることである。一般の人々にとっては, 展示は与えられたもの, すなわち受動的であり, 陳列は並べられたものから自分達で見て選択できるという能動的行為となる。人間の満足度から言えば, 受動より能動の方が大であろう。受けて側から見れば展示よりは陳列の方がいい意味にとれる。しかし, 陳列において選ぶということは, 多くの中から探す・見つけ出すということであつて, 展示よりは労力を必要とする作業になる。このように考えると展示にも陳列にも一長一短があり字面の上では甲乙つけがたい。”

この論文を筆者なりに解説すると, 文字解釈をすると展示と陳列はちがう(筆者は文字解説をした出典が明示されていないのでコメントできない, 是認した上で論旨をすすめる)。「展示」は人に見せる(理解させる)ために展示者の主張とか目的とか意図を利用者に押しつける形のものであるから, 利用者にとっては与えられたもの, 即ち受け身にならざるを得ない。それに対して「陳列」は(何かの基準にもとづいて)きちんと並べられたものである。展示者は学会等で定着していない自己流の学説等を押つけるような方法は避けて, 普遍的に一般化している基準に従って「もの」を並べることである。利用者はその中から自分で探し出して好きなもの, 興味のあるものを見て楽しむ。この方法は利用者の能動的意欲があつてこそ有効に機能するものである。筆者は油井のいう陳列は図書館の配架式展示と思えばよいと思う。図書館利用の場合, 漠然と目的なしに入る人はいない。能動的意欲が利用者側にあつてこそ図書館は有効に機能するのである。自分で本を捜そうとする意欲が前提条件である。博物館の場合でも, 図書館利用者のような気持ちで来館する人々のため

に用意すべきものが必要で、それに応えるものが陳列であると油井は説明している。図書館とちがって博物館の場合には、現在は漠然と訪れる利用者が圧倒的に多いから、それらの人々にとっては「陳列」は陳腐なものとして映るきらいがあるだろうが、「もの」自体の属性を調べようとする利用者や専門の研究者からみれば「陳列」の方が楽しいであろう。

筆者の経験であるが、かつて和達清夫博士（気象庁長官、埼玉大学長、学士院長）と雑談していた時、「この頃の博物館は昔のような面白さが無くなったね」と言われたことを思い出す。この言葉の意味は、この頃の博物館は陳列形式のものが少なくなって、展示形式のものばかりになったことに対する不満の発言だったのであろう。油井が“人間の満足度から言えば、受動（展示）より能動（陳列）の方が大であろう。受けて側から見れば展示よりは陳列の方がいい意味にとれる。”と書いているのは和達博士の代弁者と理解することができる。しかし、展示よりも陳列の方が良いとする考え方には異論も多いのではなかろうか。それを考慮した上で油井は一長一短があると結んでいるのであろう。

さて、この論文でいう「展示・陳列両立論」に対する筆者のコメントであるが、前述したとおり、文字解釈（語源）論から論旨が展開しているので、出典が不明なので、それには言及できないが、筆者は博物館が利用者を受け入れるお皿として①一般市民や漠然とした利用者を対象としたものと②研究や学習を目的とした利用者を対象としたものとを準備しておく必要がある。そのことが大切なのであって名称は「展示」であろうと「陳列」であろうと、こだわる必要はない。筆者（1958）（1964）の論文、二重展示法（Double Arrangement System）は油井の言わんとする展示と陳列の両者の必要性和その方法ならびに Museographical な実践例を発表したものであるが、用語としては両者共に「展示」で統一している。

III 辞書にみる展示と陳列

「展示」と「陳列」という用語は辞書の上ではどのように扱われているのであろうか。また両者が辞書に載るようになったのはいつ頃からであろうか。

明治22年（1889）から24年（1891）にかけて出版

された「言海」には両者共に載っていない。その当時、使用されていたと思われる「展観」という用語も載っていないが、この辞書の草稿（手書き原稿）には「展観」という文字だけあり、その説明はついていない。多分、編集者の判断で説明のついていない用語は載せる意味がないとしてカットしたのであろう。大正元年9月（1912）にも「言海」が発行されているが、この辞書にも陳列及び展示の用語は載っていない。

大正11年10月（1922）大倉書店より「言泉」が出版されている。この中には「展観」と「陳列」が出ており、「展示」は載っていない。展観：ひろげてみること。陳列：ならべたつこと。ならべおくこと。と記している。

「陳列」という用語は大正11年以来、筆者が調べた辞書にはすべて掲載されているが「展示」という用語が出てくるのは昭和51年5月（1976）角川国語辞典が最初である。1年前の昭和50年3月（1975）小学館から発行された「日本国語大辞典」には「展示」という用語は載っていないのである。

昭和51年以後出版された辞典には表-1で示してあるとおり、「陳列」も「展示」も共に掲載されて現在に至っている。そこで、両者を文字の語源的解釈で、その内容を定義づけ区別することが可能なのであろうか。前述した油井の説によると、展示は「人に見せて示す」ことであり、陳列は「きちんと並べる」ことであるという。筆者の調査によると大正から昭和初期の辞書では陳列は「ならべること。ならべつらねること」などで油井の説に類似しているが、展示の方は「広く一般にみせること。ものを並べて一般の人々に見せること」などと記述されており、両者の区別はつけがたいように思われる。その点、大正から昭和初期の辞書では陳列は「ならべること」であり、展示は辞書には出て来ないが、類似語と思われる「展観」では「ひろげてみる」とか「ひらいてみる」とあり、陳列と展観には、はっきりした相違がみられる。しかし、本論文の冒頭にも述べたように言葉（用語）は生きているので現在の扱い方を判断の基準にすることが妥当ではないかと思う。「貴様」と「貴方」の相違を文字づらや語源で議論しても意味のないことに思えるのである。そのような立場からみる限りでは辞書では展示と陳列では、きわ

辞書名	発行年月	展 示	陳 列	説 明 文
言 海	明治22年～24年 (1889-1891)	×	×	言海の原稿には展覧の名称だけあり説明はない。編集の時、名称もカットされ、印刷では展覧もなし。
言 泉 (大倉書店発行)	大正11年10月 (1922)	×	○	陳列：ならべたつること。ならべおくこと。 展覧：ひろげてみること。
祥 漢 和 大 辞 典	大正15年 (1926)	×	○	陳列：ならべること 展覧：のべひらいてみる
大辞典(増補版)	昭和15年 (1940)	×	○	陳列：つらねならぶこと 展覧：ひろげみる。品物を陳列してみる。
辞 苑	昭和19年6月 (1944)	×	○	陳列：品物を並べつらねること 陳列室，陳列館
大 言 海	昭和31年3月 (1956)	×	○	陳列：ナラベタツルコト ナラベツラヌルコト
日本国語大辞典 (小学館発行)	昭和50年3月 (1975)	×	○	陳列：並べつらねること。づらりと並ぶこと。多くの人に見せるために品物を並べること。
角川国語辞典	昭和51年5月 (1976)	○	○	陳列：人にみせるために品物を並べること。 展示：広く一般にみせること。
国語大辞典 (小学館発行)	昭和56年12月 (1981)	○	○	陳列：並べつらねること。ずらりと並ぶこと。多くの人に見せるために品物を並べること。 展示：品物，作品などを並べて一般の人々に見せること。
広辞苑(3版) (岩波書店発行)	昭和58年12月 (1983)	○	○	陳列：見せるために品物を並べておくこと。 展示：品物・作品を並べて一般の人々に見せること。
大 辞 林 (三省堂発行)	昭和63年11月 (1988)	○	○	陳列：人々に見せるために品物を並べること。 展示：作品などを並べて多くの人に見せること。
日本語大辞典 (講談社発行)	平成元年11月 (1989)	○	○	陳列：見せるために品物を並べること。 展示：品物・作品などを広く一般に並べてみせること。

表-1：辞書に掲載された陳列と展示の歴史

○印：掲載されている辞書。×印：掲載されていない辞書

めて酷似しており、両者の区別はでき難い。表現を変えていえば両者は同義語と結論せざるを得ないのである。それでは何故、昭和の中期以降になって「展示」という用語が登場したのであるのか。その必要性はどこにあったのかという疑問は残るが、この点については後述することにする。

IV 文献にみる展示と陳列

博物館学者及び博物館人は「展示」と「陳列」をどのようにとらえ、使い分けているのだろうか。日本における博物館学の創始者とよばれている棚橋源太郎の著書から当たってみることにする。

(1) 棚橋源太郎の著書

(イ) 世界の博物館，(昭和22年，1947) 講談社

この著書の中では、すべて「陳列」という用語を用いて記述しており、「展示」という表現は全く使用されていない。用語としては陳列，陳列品，陳列室，集団式陳列法，時代陳列室，陳列方法，陳列装置，陳列床面積，常設陳列等で、ここで使用されている「陳列」という用語は、そのまま「展示」という用語に置き換えても問題は生じないと思われる。

(ロ) 博物館学綱要，昭和25年(1950) 理想社

この著書では「陳列」と「展示」が併用して用いられているが、両者を区別して用いている形跡は全く認められない。見出しのタイトルでは「展示」を出しているが、文章の中では展示は消えて陳列という用語だけ使用しているのである。例をあげると次のような具合である。

第5章：蒐集品の展示。第1節：博物館資料の展開。文章中では資料の戸外展覧，系統陳列と集団陳列，原地集団陳列(Habitat group，生態展示のことをこうよんでいる)。第2節：展示の方法。文章中では陳列場所，陳列ケース，陳列用具，ケース内の展示法，ケース外陳列の長所と展示法といった具合である。「ケース内の展示法」「ケース外の陳列法」という使い方は用語使用の混乱とも見られるが，著者は多分，同義語と思っているので，何の矛盾も抵抗も感じないで筆を進めたものと思われる。

(ハ) 博物館教育 昭和28年(1953) 創元社

この著者の中でも「展示」と「陳列」は混用されている。「博物館資料の陳列，博物館陳列方法」という用語を使っているかと思えば「資料の配列・展示，



図-1：生態展示の例(岩手県立博物館)丹青社製作
現在は展示のモデルになっているが、昭和20年代には川村多実二（京都大学教授、1920）もアメリカでこのような展示を見て「生態陳列」とよんでいた。

資料の展示」いった表現も出てくるのである。

(一) 博物館・美術館史 昭和32年（1957）

この著書の中でも、相変らず、無作意に「展示」と「陳列」が使用されているが全体的にみると「陳列」が減少して「展示」の方が増加しているのが特徴的である。棚橋の著作活動10年間（1947～1957）の中で当初は陳列一辺倒であったものが10年後には展示の方に移行していく姿が読みとれるのは興味ある事実である。

(2) 木場一夫の著書 新しい博物館（1949）

この時代に出版された著書の中に木場一夫の「新しい博物館」がある。彼は棚橋と同時代を生きた博物館学者であるが、文部省や大学とも深くかかわっていたためか、年齢が若干若かった関係か、彼は全面的に「陳列」という用語を排して「展示」一本で通しているところが面白い。その事例をあげておく。

第2章：博物館の目的を達成する方法、4：展示。文章中では「展示、展示品、展示資料、展示室」

第3章：博物館の施設、文章中では「展示室とその設備、生態展示、展示、展示室、展示品、展示ケース、展示資料、展示形態、展示形式」といった具合である。こうしてみると棚橋の使用している「陳列」に対応するものは、すべて「展示」という用語に置き換えられていることが解る。このことは陳列

イコール展示であって、展示を内容的に陳列と区別して使ったものではないと思うのである。

(3) 新井重三の論文 総合展示の原理と発展について（1953）

昭和20年代、棚橋、木場の図書発行時代に筆者は展示に関する論文を出している。昭和28年（1953）、日本博物館協会会報16号に投稿した「わたくしの博物館学——総合展示の原理と発展について——」である。この論文で筆者は一貫して「展示」を使用しているが、その当時、陳列と展示の用法を意識的に区別した記憶はない。棚橋先生には、当時、直接に指導を受けていたが、展示と陳列という用語の使い分けについて教えていただいた記憶はない。算術というのをやめて算数という。理科をやめて科学という。地学をやめて地球科学という。昔は博物学と言っていたが現在では博物学は辞書の上だけに残っている死語で自然史科学とよんでいるのによく似ている。いまさら死語に近い「陳列」を俎上にあげて「展示」との相違を議論すること自体おかしいことだとも思うのである。

(4) 日本博物館協会編 博物館学入門（1956）

昭和31年（1956）に入って日本博物館協会は博物館学推進策の一環として「博物館学入門」を出版した。総論は鶴田総一郎が執筆し、各論は分野別、専門別に当時の博物館学研究者を総動員して執筆を分担した。16名の執筆者は「展示」と「陳列」をどのように使い分けているのか興味ある問題なので、それを分析した結果について記してみる。

(イ) 展示で統一している執筆者（順不同）

岸本喜代治（鳥取県立科学博物館）、鶴田総一郎（国立科学博物館）、羽根田弥太（横須賀市博物館）、佐伯敬紀（山口県立博物館）、村田良作（鎌倉近代美術館）、宮本馨太郎（民族学博物館）、岡本公平（国立科学博物館）、田中六郎（大阪市立電気科学館）、小倉謙（東京大学附属植物園）、新井重三（秩父自然科学博物館）。以上10名、執筆者全員の62.5%

(ロ) 陳列で統一している執筆者

野間清六（東京国立博物館）、酒井千尋（根津美術館）、佐竹義輔（国立科学博物館）、上田稷（生駒山天文博物館）。以上4名、25%

(ハ) 展示と陳列を混用している執筆者

矢島恭介（東京国立博物館）1名

(二) 排列という語を使用している執筆者
古賀忠道(恩賜上野動物園) 1名

以上の結果でもわかるように昭和31年になると博物館人の半数以上62.5%の人は「陳列」という言葉から離れて「展示」という語を使用している。相変わらず「陳列」に執着している人は25%いるが、これらの人々は申し合わせたように高齢者であり、展示という新しい用語への切り替えが出来なかったのか、やろうとも思っていなかったと推察される。当然のことながら、すべての執筆者は「展示」と「陳列」は同義語と考え、自分の趣味で両者のいずれかを使っていたのであろう。例外的に古賀忠通は「排列」という語を使用しているが、この文字は現在でも図書館では生きており司書の間では「排列=配列」「排架=配架」が使用されている。ちなみに辞書でみると排列とは「順序よく並べること。並べつらねること」とあり陳列と同義語である。

V 博物館行政・官庁用語にみる展示と陳列

幕末に欧米に渡った徳川幕府の要人達は博物館をどのように見ていたのであろうか。万延元年(1860)時の副使、村垣淡路守範正の記した「遣米使日記」にはPatent OfficeとSmithsonian Institutionのことを「百物館」とよんでいる。しかし名村元度の「亜行日記」ではパテントオヒス(Patent Office)に対して「博物館」と和訳している。その後の記録では多くの要人が「博物館」という用語を用いているので「百物館」の方は消えたものと思われる。また、玉虫左太夫の「航米日録」には「此処ニハ地球及ビ奇品ヲ列ス」とか「珍禽奇獸并万国ノ什器ヲ列ス」と記し、「列ス」とだけ書いてある。意味は陳列するということであろうが、まだ「陳列」という用語は用いていない。万延元年から慶応元年まで、わずか5年間の間に自己流につけられた名称は次第に「博物館」に定着したが、「陳列」という訳語は何時、誰が使用し始めたのであろうか。

文久元年9月蕃書調所に「物産方」がおかれた。これが我が国における博物館の起源であると言われている。翌文久2年田中芳男が物産学出役となり、その時彼は初めて「陳列」という言葉を使っている。この記録は「田中芳男君七六展覧会記念誌」に載っているが正確な年月は定かでない。文中に慶応2年

のことが記してあるので、慶応3年(1867)以降に記したものであろう。明治に入ると田中は「陳列」という用語を盛んに使用しているが、大学南校博物館の公文書では「駢列」という用語を用いている。

明治8年5月ウィーン万国博覧会に出張した佐野常民は帰国後の報告書「博物館部」の中で「展列」という用語を用いているが、この言葉も「駢列」と共に消えて、やがて「陳列」という言葉に統一された。明治10年代に入ると文部省関係の公文書でも「陳列」を使用している。

それでは「陳列」に代って「展示」という新しい用語はいつ頃から出現したのであろうか。明治~大正時代には「展示」という文字を使った形跡はない。東京国立博物館100年史及び国立科学博物館所蔵文書等によると大正13年頃の公文書では、すべて「陳列」の文字を使用している。この流れは昭和に入っても同様で、昭和7年の「東京科学博物館出品規則」でも「陳列」という用語を用いている。

「展示」という文字が初めて出現したのは昭和11年12月、東京科学博物館が発表した「皇紀二千六百年記念東京科学博物館拡張計画案」で、この書類の中で「陳列」は13カ所に使用されている中で「展示」が2カ所使用されているのが目立つ。文中でも「実物を展示する」とか「実物展示の方針」という場合に使用しているが、その隣りでは「蒸気機関を其儘陳列運転して」と記しているところをみると展示を陳列と意識的に区別したとは考えられない。それでは、なぜ、「展示」という用語を用いたのか、その理由は不明である。なお、計画案に続く昭和11年作成の予算調書では陳列場、陳列室等すべて「陳列」で統一した予算書になっている。

昭和15年7月当時の東京科学博物館長、坪井誠太郎は官制の改正上申書(文部大臣宛)の中で「資料並ニ物品を蒐集、整理、保存シ、適当ト認メラレルモノハ之ヲ展示シテ社会教育ノ資トナシ」と書いているがその他のところでは陳列を使っているの、展示は定着しておらず、陳列から展示に移行する「はしり」とみることができる。

昭和20年の終戦は日本のすべての面において大きな転換期であり博物館界にも大きな変化がみられた。昭和24年文部省設置法が制定され、東京科学博物館は廃止されて国立科学博物館が設置された。この時

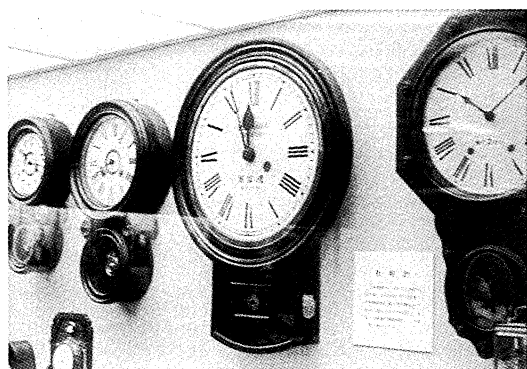


図-2：掛時計(柱時計)の分類展示(specific fact)

この展示は各種の掛時計そのものの形態・デザイン等を見て貰うために展示しているので、展示技術・手法等が不十分だと単なる羅列と受けとられ、分からない展示と評されたり、展示と区別して陳列と言われたりすることがある。

の公文書にも「展示」という文字が使用されているが、館内部では定着したとは考えられない。昭和34年の「自然史部門整備拡充計画案」では「展示」という文字は見当らず、陳列関係職員、陳列室、陳列用標本などの文字が使用されている。昭和28年の「文部省設置法施行規則の国立科学博物館」のところで「展示」を使用しているところを見ると、官庁の方が積極的に「展示」を使用しており現場の博物館の方が従来の習慣にこだわっているようにみえる。

昭和26年(1951)という年は博物館界にとって記念すべき年である。それは博物館法が制定された年であり、かつ日本博物館協会の改組・再建を実現した年でもある。改めて述べるまでもないことであるが博物館法及びその関連法規(博物館法施行令、博物館法施行規則、公立博物館の設置運営に関する基準、公立博物館の設置及び運営に関する基準の取り扱いについて等)では一切「陳列」という用語は使用せず「展示」という文字で統一している。当然のことながら法律は博物館の設置、運営の関する規制であり、基準であるので、博物館法の公布を契機にして「陳列」という用語は影をひそめ、全国の博物館関係の役所や現場で「展示」が普及・定着していったものと理解される。一部年輩の人で「陳列」という言葉に使い馴れている人は、無意識に「陳列」を使っているために個人の著書・論文等に散見され

るのが現状ではないのであろうか。

VI 展示と陳列は同義語(昔は陳列今は展示)

展示と陳列の意味の相違、使い方、言葉(用語)の歴史、移行状態等の視点に立って①辞書のうえから②著書・論文では③博物館行政文書の中での3方面から調査した結果は上述したとおりである。その結果から分かったことは、語源的にみると「展示」はすでに倉田公裕も述べているように「開いて示す」ことであり「陳列」は「ならべつらねる」ことであるが、両者は時の流れの中で融合して現在の辞書では「陳列」は「見せるために品物を並べること」であり「展示」は「ものを並べてみせることである」となっており両者の間に差異は認められない。次に著書・論文の方であるが、全体としては昭和20年代の著書では多くの人が「陳列」を使っているが、昭和30年代に入ると「展示」を使用している人が多くなっている傾向が見られる。陳列から展示への移行は現れているがそれは、きわめて漸变的であり平成2年(1991)に至っても相変らず「陳列」を使用している論議や論文もあるというのが現状である。それでは、このような人は「陳列」は「羅列・並列」を意識しているのか。また「何の意図、目的、理論も持たずに」生魚を天日にさらして干物をつくるときのように並べることをイメージして「陳列」という用語を用いているかと言えばそうではないのである。陳列法も展示法も同じ内容なのであろう。次に、博物館行政用語を追ってみると、幕末に欧米を訪れた使節団は、全く同じ Museum なるものを視て、ある人は「百物館」と訳し、ある人は「博物館」と和訳した。この場合、百物館も博物館も同義語なのである。

幕末から明治、大正、昭和にかけて、博物館の「もののみせ方」に対してどんな言葉が出てきたのか、まとめてみると「列す」、「排列」、「駢列」、「陳列」、「展示」という順序になりその他「展観」、「展列」なども出てきたが、泡沫のように消えたもの、余命いくばくもなく去ったものがあり昭和にまで生き残ったのが「陳列」であり、昭和に入って出てきた言葉が「展示」ということになる。この言葉もいつまで続くか永久の生命が保障されているわけではないのである。



図-3：羅列のようにみえる展示(立山砂防資料館)
ものが雑然と置いてあるようにみえるものは足駄、爪皮、キセル、タバコ盆、ランプ、五徳、ヤカン、コネ鉢、コテ、背負子、藁草履、ワラジ、輪カンジキ、柄杓などで、何の理念・目的もないようにみえるが、よくみていると雪国の農家の生活用具で統一されている展示である。しかし、利用者を説得させる展示手法や技術には欠けているので羅列と誤解される。

(1) 陳列に対する棚橋源太郎の理論

昭和25年に発行された棚橋著「博物館学綱要」によると、65頁にわたって陳列及び陳列法について詳細に述べられている。陳列の理念、概念、意図、目的等は勿論、展示の方法についても二次的配置（収蔵庫陳列と陳列館陳列）、系統陳列と集団陳列、原地集団陳列（現在の生態展示のこと）、時代陳列、動力応用陳列、ケース外陳列、陳列替と特別展観（現在の特展＝特別展示のこと）等について具体的な図や写真を用いて説明しており、すべての「陳列」を「展

示」という言葉に置き換えても現在の博物館学に立派に通用するものである。

前述した「展示と陳列相違論」を述べている方々が「陳列」は「羅列・並列」と同義語の如くに扱われているが、それは理解に苦しむところである。羅列とは何かを定義、説明していないので、「羅列」を辞書でひいてみると「ずらりと並ぶこと、ずらりと並べられること」と書いてある。「陳列」は「みせるために並べること」であるから陳列と羅列とはかなり意味が違うようである。生魚を天日にさらして、ずらりと並で干すのは乾かすために並べるのであって人に見せるためではないから、生魚の天日干しは羅列と言ってもよいであろう。従って、陳列と羅列は同義語としては扱えないと思うのである。その意味で棚橋の頭の中にある陳列は展示と同義語と思うのである。

(2) 展示と陳列相違論の出る背景

現実問題として博物館や美術館を見ていると、「展示がわからない」という声をよく聞くことがある。「意図や目的が分からない」「内容が分からない」「何を言わんとしているのか分からない」という展示があることは事実であるが、それは同時に見る人の理解力の不足による場合もあるかも知れない。しかし、多くの場合、展示者側の展示手法や技術の不足による場合が多いだろう。展示の作成側が見て貰う対象者をどのレベルの人達におくかということによって異なってくる。教科書を作る場合、大学生向けの

	展示の意図・目的	展示例	展示手法	対象・備考
ものを語る what	① Specific fact ものの持つ属性や特性を正確に伝達する展示	個体展示 鑑賞展示 分類展示	Presentation (提示型展示) ものそのものを直接提示し、利用者は、よく観察・鑑賞することによって自らの発見や感動を促す展示。 利用者の能動的意欲が前提となって成功する。	主として研究者・学習者及び展示物に関心・興味のある人が対象。 展示手法が十分でないと「物に語らせる」展示になり、羅列と誤認される場合がある。
	② Concepts 個々のものの中から共通する要素を取り出して総合して見せる展示	比較展示		
もので語る why	③ Principles ものの持つ特性を使い組合せて普遍的な学説、原理、物語り等を展開する展示。	生態展示 (食物連鎖等) 構造展示 歴史展示	Interpretation (説示型展示) 展示者の意図・目的・主張等を理解して貰うために補助的解説、図表、機器等を駆使して説示する展示。 利用者は受身の形で見るができる。	主として一般の見学者、観光客等が対象。 意図や目的のはっきり分かり、解説帰結型であるので素人にも理解される展示。
	④ Problems 問題や課題を出してそれを解くためにもので説明する展示。	課題展示		

表-2：意図・目的による展示の分類

教科書を小学生用に使っても小学生に分かる筈はないのである。展示は一般に専門家によって作成されるので、ややもすると素人には分からない場合がある。一方、利用者側が持っている展示に対するイメージ、期待感に合わない展示に対しては満足感を得ることはできない。意図や目的も分からなく感ずる場合もあると思う。ものがただゴロゴロ並んでいるように見える展示でも自分の専門領域であれば、それなりに関心興味が湧き楽しめるが、専門領域外の方野となると意図も目的も分からなく映ることになる。しかし、現在の博物館では、何の意図も目的もなしに展示することはあり得ないと筆者は思っている。力不足のために、それが利用者に伝わらないことがあるのだろう。その意味では、分からない展示、読めない展示は困るので展示にたずさわる学芸員は不断の努力をする必要がある。

表-2 は展示の意図・目的を展示手法によって分類したものである。これによると、展示は Presentation 型（提示型展示）と Interpretation 型（説示型展示）に分けることができる。提示型展示は「もの」を中心（核）にして展示するものであり、ものを語る展示と言ってもよい。「ものをして語らしめる展示」という人もいるが、ものは黙っていては語らない。語らしめるためには、それなりの手法を講じなければならないが、それを怠ってしまうと、ものを並べてあるだけになってしまう。これは羅列だという烙印を押されかねない。前述した加藤有次、佐々木朝登それに倉田公裕が述べている陳列説は筆者のいう未完成（未熟）の提示型展示に対する批判であ

らと思うのである。次に油井の展示と陳列の一長一短論であるが、これは筆者のいう提示型展示を陳列と決めつけ、説示型展示だけが真の展示であるという主張であろう。しかし、彼は表現こそ異なるが、展示と陳列を同格に扱い、両者の価値・効用を評価した上で、その間に優劣、格差をつけようとはしていないのである。従って陳列も展示に仲間入りさせて、表現を陳列イコール提示型展示とすることが出来れば筆者の提案でまとめることが出来ると思うのである。

VII 展示の意図・目的による分類

展示は、それを施行する事業者によって意図や目的は異なってくる。大別すると、いわゆる商業展示（デパートの商品展示、メーカーのショールーム展示等）、行政・広報展示（国や自治体の広報展示）それに博物館等の文化・教育施設の行方情報伝達のための展示がある。ここでは博物館の展示に重点をおいて述べることにする。

(1) 一般的展示の意図・目的

一般的に展示の意図・目的を分類してみると次のような内容のものがあげられる。

- (イ) 販売促進を目的とする展示
- (ロ) 自己主張（美術の個展など）
- (ハ) 権威や力の表現
- (ニ) 製品の普及・拡大
- (ホ) 情報の伝達と周知・徹底
- (ヘ) 文化・教育の向上と伝達

上記のうち博物館の展示は(ヘ)に属する展示が中心

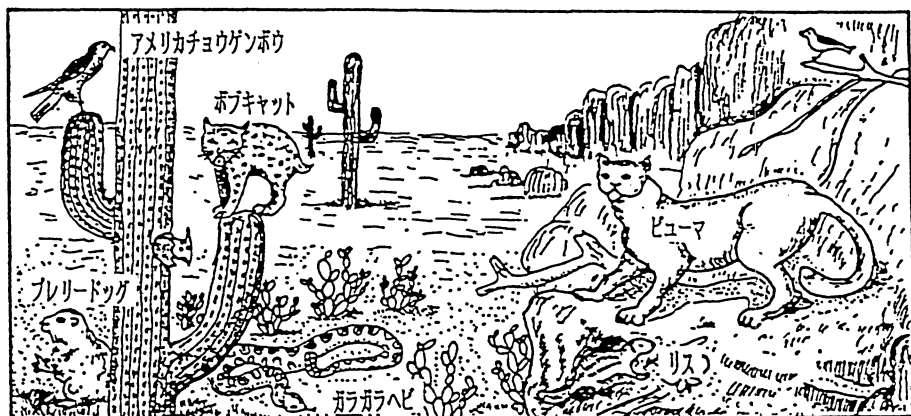


図-4：principle(普遍的原理)の例として食物連鎖をコロラド砂漠を舞台にとりあげ生態展示の形式をもって表現した説示型展示 (Interpretation)

になるであろう。

(2) 博物館における展示の意図・目的

筆者は「博物館学講座第7巻(雄山閣, 1981)」の「展示と展示法」において展示を定義し、次のように述べている。「博物館における展示とは展示資料(もの)を用いて、ある意図のもとに、その価値を提示(Presentation)するとともに展示企画者の考えや主張を説示(Interpretation)することにより、広く一般市民に対して感動と理解、発見と探究の機会を提供する空間を構築する行為である。」ここで、「ある意図とは何か」ということであるが、「見せる」「見て貰う」ことが大原則の意図・目的である。「見せるために並べる(陳列)」ことも、「並べて見せること(展示)」ことも「見せる」という点では同じ目的である。「並べる」ことは手段・方法であり、これも辞書でみる限り同じである。従って生魚を並べて天日に当てて干物を作る行為は目的が干物を作ることであり、見せるためではないから展示にはならないのである。さて次は何をみせるかであるが、大別して博物館の場合には①鑑賞、観察して貰うために見せる場合と②分かって貰う、理解して貰うために見せる場合とのふたつがあると思う。美術館などの多くの展示は前者を意図しており、科学系の博物館の多くの展示は後者を意図している場合が多いと思われる。さらに意図を整理・分類してみると次のようになると言われている。

(i) Specific facts (感動・発見展示)

展示資料(もの)の持つ属性や特性を正確に伝達しようとする展示で、利用者に最もよい条件のもとに提示し、観察、鑑賞をととして利用者自らが、なにかを発見したり、感動することを意図した展示である。この展示が成功するためには利用者側に一定の素養、経験、関心等があり、積極的、能動的な意欲があることが前提となるであろう。俗にいう「物を語る展示」であるから物だけに語らせようとする一般の市民にとっては「わからない」「つまらない」展示に映ってしまい「これは展示じゃない、陳列だ、羅列だ」という議論の対象になる危険性がある。

(ii) Concepts (概念形成展示)

個々のものの中から共通する属性(要素)をえらび出し、その属性を総合して、ひとつの概念をまとめて提示する展示である。自然史科学分野で言えば

ワシ、タカ、ハヤブサ、等に共通する嘴の形、爪の形等を比較させて猛禽類の概念を導き出す展示などである。具体的には比較展示などがこれに当たる。この展示も利用者側に正確、詳細な観察が要求されるので能動的な意欲があつて達成される。自分の眼で手で、五感を使って共通属性を捜し出すためにはガラスケース越しでは不可能な場合もあるので博物館側はアクセス権も認めそのような希望者を受け入れる態勢も用意しておくことが望ましい。

(i) Principles (法則理解展示)

展示資料(もの)を駆使して、証拠だてながら、ある学説とか法則、原理等を組立て理解を求める展示である。この場合、展示者は何を主張するか、何を訴えようとするかを明確にし、証拠となるものを揃えて説得力のある展示を構成することが肝心である。食物連鎖という自然界の法則を展示しようとする場合には生態展示の手法を用いれば効果的であろう。この場合には利用者は受身(受動的)にならざるを得ないのがこの展示の宿命であるが一般の利用者、一過性の観光客等には、かなり人気の高い展示である。

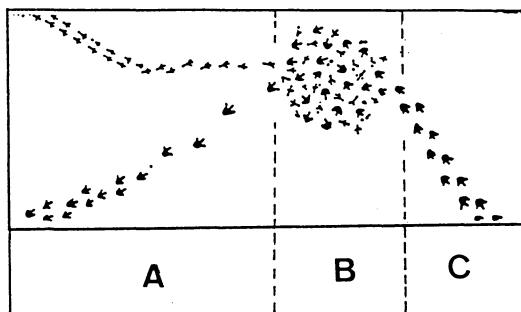


図-5: problem (課題展示) の事例

この展示は中生代白亜紀の地層から発見された動物の足跡化石です

- (1)動物は何匹いたでしょう?
- (2)どんな仲間(種類)の動物といますか?
- (3)土地は乾いていたか、湿っていたか、どちらでしょう?
- (4)土地は小石や砂地だったか、細かい泥や粘土だったでしょうか?
- (5)Bのところでは何が起きたと思いますか?
- (6)A, B, Cの順にお話しして下さい?

Aのところでは? Bのところでは? Cのところでは?

(二) Problems (課題解決展示)

展示の主題に「なぜだろう」「なぜかしら」といった質問形式の課題を出して、利用者に問題意識を持たせ、解く鍵がしに挑戦させようとする展示である。特に科学技術系の博物館における参加型展示に多くみられ、サンフランシスコのエクスプロアトリウムはその典型的博物館であろう。

一方、自然史系、歴史系、美術系の博物館では、いわゆるワーク・シートを用いて成功している例が多く、我が国でも今後の発展が期待される。この展示は結果よりも思考過程が重視されるので、場合によってはオープンエンド（未解決のままで終る）で終る場合もある。

(a) Do it yourself (あなた自身でやっごらん)

前述したエクスプロアトリウム (Exploratorium 探検館) をはじめ、パリの Palace of Discovery (発見の宮殿) などは参加型の博物館として君臨しているが、このような Do it yourself を売り物にしている施設を「展示」として扱えるかどうか疑問である。この施設は見る展示ではなく、利用者が身体を使って行動することによって成り立っている体験学習の場である。見るという行為だけでは成り立たない。展示は「見る」、「見せる」施設であるとするれば展示とは言えないという理論も成り立つ。東京の国立科学博物館では現在「たんけん館」なる施設を設けているが一般の展示室とは区別して位置づけている。展示の一種として展示に包含するか、別な名称を与えた方がよいのか微妙なので、この論文では保留しておく。このような施設は今後益々発展するであろうから、今後の経緯を見守っていくことにする。

VIII 提示型展示と説示型展示

展示の意図・目的による分類表は表-2 に示したとおりである。それによると展示手法は提示型展示 (Presentation) と説示型展示 (Interpretation) に大別される。これに、いわゆる参加型展示と言われているものを展示として認められる日が来れば、前者に加えて参加型展示 (Do it yourself) が付加されることになる。その場合には展示の定義を再構成するか、展示という用語に代る新しい用語をつくることになるであろう。「体験型展示」として展示の中に含ませるのも面白いかも知れない。一応、ここでは

この問題にはふれないことにして提示型展示と説示型展示を博物館でどのような比率で扱うべきかを図にしたのが図-6 である。A 博物館は説示型10%に対して提示型の展示は90%の博物館、B 博物館は両者50%の博物館、C 博物館は説示型90%に対して提示型が10%を占めている博物館であることを示している。一般論で言えば、C 博物館的な博物館には自然史系、歴史系などの博物館が多く含まれ、A 博物館に属するものには美術系の博物館が多く含まれる傾向がある。望ましい形としては両極端の展示のみの博物館は望ましいとは言えない。提示型展示は一般市民からは必ずしも歓迎されていないので説示型の展示が主流になっているようにみえるが今後、生涯学習が定着し、個人の自由な意志によって自分に適した方法で、自分の責任において継続して学習する人達が利用するようになれば提示型展示の方が喜ばれるようになるであろう。

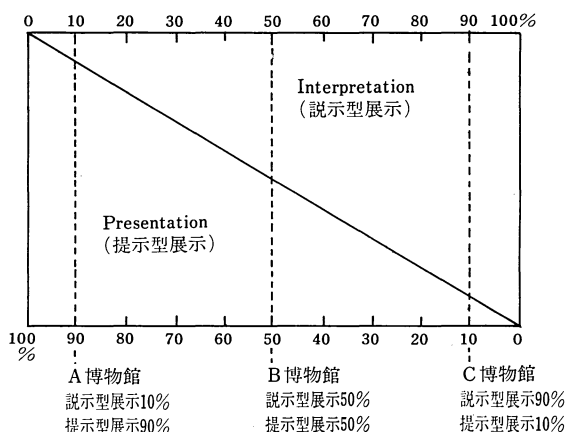


図-6 博物館における説示型と提示型の展示比率を示す図

文献

- 油井 隆, 1986, 展示と陳列. 電通発行「展示学」.
新井重三, 1953, 総合展示の原理と発展について.
日本博物館協会会報, No. 20.
新井重三, 1958, 博物館資料の展示法とその形態について. 博物館研究, Vol. 31, No. 10.

- 新井重三, 1963, Double Arrangement System の採用. 博物館研究, Vol. 36, No. 2・3.
- 新井重三, 1970, 博物館の展示. 博物館研究, Vol. 42, No. 2.
- 新井重三, 1981, 展示と展示法. 博物館学講座, 第7巻 (共著), 雄山閣
- 新井重三, (共著), 1981, 博物館における歴史展示のあり方と実態. 博物館学雑誌, Vol. 7, No. 1.
- 新井重三・安井 亮, 1988, 博物館ワークシート. Museum Data, No. 7, 丹青総合研究所.
- 新井重三, 1991, 展示論: 展示と陳列はどこがちがう. MDB GAZETTE, Vol. 5, No. 10, 丹青総合研究所.
- 加藤有次, 1977, 博物館学序論. 雄山閣.
- 川村多実二, 1920, 米国博物館の生態陳列. 動物学雑誌, Vol. 32, No. 380.
- 木場一夫, 1949, 新しい博物館. 日本教育出版社.
- 倉田公裕, 1979, 展示論「博物館学」東京堂出版.
- 日本博物館協会編, 鶴田総一郎他共著, 1956, 博物館学入門. 理想社.
- 日本博物館協会編, 1981, 博物館関係法令集. 日本博物館協会.
- 佐々木朝登, 1989, 展示「博物館ハンドブック (共著)」。雄山閣.
- 棚橋源太郎, 1947, 世界の博物館. 講談社.
- 棚橋源太郎, 1950, 博物館学綱要. 理想社.
- 棚橋源太郎, 1957, 博物館・美術館史. 長谷川書房.
- 梅棹忠夫, 1984, 展示学の課題と方法. 展示学 1, 展示学会発行.
- その他の辞書資料
- 言海 (1889~1891), 言泉 (1922), 祥解漢和大辞典 (1926), 大辞典 (1940), 辞苑 (1944), 大言海 (1956), 日本国語大辞典 (1975), 角川国語辞典 (1976), 国語大辞典 (1981), 広辞苑 (1983), 大辞林 (1988), 日本語大辞典 (1989).